

はじめに

人生最後の儀礼が、葬送儀礼である。新型コロナウイルスの流行が拡大する前までは、私たちは、人生最後の儀礼を可能な限り丁寧に且つ盛大に行い、この世と別れる人の霊を慰めて来た。しかしコロナ禍の現今では、ごく近い親族のみでなされ、静かに送り出すことを余儀なくされている。

人類が、葬送の儀礼をいつから行うようになったかは不明であるが、我が国では遅くとも縄文時代草創期にはその痕跡をうかがうことができる。栃木県宇都宮市大谷寺おほやま洞穴遺跡では、洞穴の奥に頭骨だけを集めて祀っていたことが明らかとなっている。恐らく元来は、ごく身近な親族だけで死を悼み弔うということが行われていたのであろうが、居住集団が大きくなりムラが形成されるようになると、弔いの儀礼も拡大していったと考えられる。死は怖れであり、大きな悲しみであるがゆえに、近親者以外の者もその悲しみを共有することで、集団の団結をより強めることもできたであろう。

縄文時代には、墓は集落の真ん中に造られることが多かった。この形は、日本だけでなくニュージーニア東南海上のドブ島等でもみられたものであるが、それらはいずれも死者（先祖）の霊に守られることにより、生者が平穏な日々を過ごすことができると思われた証かと思われる。数年前にペルーのクスコの民家を訪問したことがある。入り口を入ると右側に祭壇があり、そこには黒ずんだ三体の頭骨が祀られていた。祖父母と曾祖母のものであるとのことであった。日々、これらの先祖の頭骨を祀り、ともに暮らすことにより、自分たちの生活が守られるという思いからのものであろう。これは、日本人が仏壇を祀ったり、墓参りをしたり

するのと同じであり、古代から私たちが持ち続けてきた人間の心かとも思われる。

一方で、弔いの儀礼が集団化するにつれて、死への悲しみを共有することが求められ、悲しみを形で表すことが行われるようになる。泣くという行為は、本来は死の悲しみから生まれる人間の自然な感情であるが、次第に周囲の人に悲しみを形で表すことが要求されるようになり、わざと大声で泣くようになる。更には、「泣き女」等、泣くことを役目とする者まであらわれるようになった。一方で遺族は、悲しみの心を形で表すことも必要となり、喪に服す装いが生まれていったと考えられる。

『魏志』倭人伝に記されている弥生時代の喪に服す人の姿は、髪も梳かさず、衣服も着替えず、虱もとらず、死者が出た時の姿を変えないというものであった。その後、恐らく大陸文化の影響からであろうか素服（白麻布衣、もしくは生成り麻布衣）が喪服として着用されるようになった。以降、その色は黒になったり白になったりしながらも、麻布を基調として喪服は継承されていく。葬送の儀礼や喪服は、その後の仏教の影響や神道国教化政策の影響等により変化をしてきた。しかし一方で、我が国古来の風習である死者が出た時の装いを変えないという行為は、季節が変わっても服喪期間は「衣替えをしない」という形で中世まで継承され続けてきたのである。

人間の死を怖れる気持ちは、葬送儀礼を変えることをも怖れた。従来と変わったことをした為に新しい不幸が生じることを憚る気持ちから、可能な限りその形式は継承され続けてきたのである。今日でも、地方で行われている伝統的形式の葬式では、棺飾りに鳥や鳥居がつけられているものがある。これはかつて、人は死ぬと神になると信じられ、神事と葬事が同根であった古代からの風習の継承と思われる。また、死装束や喪服の変化も、日常の装いの変化に比べると非常に緩慢であった。即ち、今日も残る伝統的な葬送儀礼とそ

の装いの中には、古代からの日本人の心が流れ続けている可能性が大なのである。

本書は、日本人が創り出し今日まで継承し続けてきた葬送儀礼とそれに伴う装い―死装束、喪服―を、宗教的側面からではなく、形式的側面からみることにし、日本人の死に対する意識を明らかにすることを目的としたものである。

二〇〇二年に、古代に焦点を絞った『日本喪服史 古代編―葬送儀礼と装い―』を源流社から出版した。その時にはそう遠くないうちに、中世編と近現代編を出す予定であったが、雑務や目先の研究に追われ、なかなか手をつけることが出来ず、とうとう二十年もの歳月が過ぎてしまった。古代編そのものも、その後の研究で修正すべき箇所がいくつか見つかったため、改めて古代編も加筆修正し、ここに通史としての『日本喪服文化史』を上梓することとした。

諸先学の方々のご指導・ご助言を仰げれば幸いである。

増田美子

はじめに 1

第一章 縄文時代～奈良時代

第一節 縄文時代～飛鳥時代の葬送儀礼と装い 14

一、縄文時代の葬送儀礼と装い 14

(一) 縄文時代の葬送儀礼 14

(二) 縄文時代の死装束と喪服 17

二、弥生時代の葬送儀礼と装い 19

(一) 弥生時代の葬送儀礼 19

(二) 弥生時代の死装束と喪服 21

三、古墳時代～飛鳥時代の葬送儀礼と装い 23

(一) 古墳時代～飛鳥時代の葬送儀礼 23

(二) 古墳時代～飛鳥時代の死装束と喪服 34

第二節 白鳳時代～奈良時代の葬送儀礼と装い 39

一、白鳳時代の葬送儀礼と装い 39

(一) 白鳳時代の葬送儀礼 39

(二) 白鳳時代の死装束と喪服 44

二、奈良時代の葬送儀礼と装い 45

(一) 奈良時代の葬送儀礼 45

(二) 奈良時代の死装束と喪服 52

第二章 平安時代

第一節 平安時代前期の葬送儀礼と装い 61

一、平安時代前期の葬送儀礼 61

(一) 天皇・上皇の葬送儀礼 62

(二) 貴族クラスの葬送儀礼 71

二、平安時代前期の死装束と喪服 73

(一) 平安時代前期の死装束 73

(二) 平安時代前期の喪服 74

三、平安時代前期の葬送行列の装い 87

第二節 平安時代中期～後期の葬送儀礼と装い 89

一、平安時代中期～後期の葬送儀礼	89
(一) 天皇の葬送儀礼	89
(二) 一般貴族の葬送儀礼	105
二、平安時代中期～後期の死装束と喪服	107
(一) 平安時代中期～後期の死装束	107
(二) 平安時代中期～後期の喪服	109
三、平安時代中期～後期の葬送行列の装い	138
第三節 庶民の葬送儀礼と装い	141

第三章 鎌倉時代～室町時代

第一節 鎌倉時代～室町時代の葬送儀礼	148
一、天皇・公家の葬送儀礼	148
(一) 天皇の葬送儀礼	148
(二) 公家の葬送儀礼	166
二、武家の葬送儀礼	168
第二節 鎌倉時代～室町時代の死装束と喪服	174
一、死装束	174

(一) 天皇・公家の死装束	174
(二) 武家の死装束	176
二、喪服	176
(一) 宮中の喪服	177
(二) 公家の私的な喪服	207
(三) 武家の喪服	211
第三節 鎌倉時代～室町時代の葬送行列の装い	214
一、天皇の葬列装束	214
二、武家の葬列装束	218
三、室町時代の喪服は、白へ回帰	222

第四章 江戸時代

第一節 江戸時代の葬送儀礼	228
一、天皇・公家の葬送儀礼	228
二、武士の葬送儀礼	231
(一) 将軍の葬送儀礼	231
(二) 御台所の葬送儀礼	233

(三) 大名の葬送儀礼	233
(四) 一般武士の葬送儀礼	236
三、庶民の葬送儀礼	236
第二節 江戸時代の死装束と喪服	241
一、死装束	241
(一) 天皇・宮中の死装束	241
(二) 武士の死装束	243
(三) 庶民の死装束	246
二、喪服	248
(一) 天皇・宮中の喪服	248
(二) 武士の喪服	260
(三) 庶民の喪服	263
第三節 江戸時代の葬送行列の装い	265
一、天皇崩御の場合の葬列装束	265
二、武士の葬列装束	266
三、庶民の葬列装束	268

第五章 明治時代以降

第一節 明治時代以降の葬送儀礼	276
一、天皇・皇太后の葬送儀礼	276
(一) 英照皇太后の大葬	276
(二) 明治天皇の大喪	279
(三) 昭和天皇の大喪	284
二、明治の要人たちの葬送儀礼	286
三、一般の人々の葬送儀礼	288
第二節 明治時代以降の死装束と喪服	293
一、死装束	293
(一) 天皇・皇后の死装束	293
(二) 一般の人々の死装束	294
二、喪服	296
(一) 大葬・大喪の際の喪服	296
三、葬儀への会葬・参列服	307
(一) 大葬・大喪の際の会葬・参列服	307
(二) 太平洋戦争前の一般の人々の会葬・参列服	311

附論 幽霊はなぜ額に三角を付けるのか

一、三角額当ての事例 323

- (一) 幽霊の白三角額当ての事例 323
- (二) 葬礼における三角額当ての事例 324
- (三) 神事他における白三角額当ての事例 328
- (四) 金色の三角額当ての事例 329
- (五) 黒色の三角額当ての事例 330

二、三角額当ての意味 330

- (一) 鉢巻状(空頂)の形態について 330
- (二) 金色三角額当ての意味 331
- (三) 黒色三角額当ての意味 333
- (四) 死者(幽霊)・葬儀の際の白三角額当ての意味 335

三、古墳時代の三角文 339

- (一) 古墳時代の三角文のルーツ 341
- (二) 古墳時代の三角文の表象するもの 342

四、幽霊はなぜ額に三角を付けるのか 347

おわりに 351

参考文献 354

引用史料 358

索引 365

十五)の記述によると、当時の挿鞋は、表裏とも綾絹で作られ、底は牛革製の美しいクツである。天皇が常用していた浅いクツであろう。

また、棺内には、河渡衣と父母が生存の場合は錫紵一襲が納められている。河渡衣がいかなるものかを明確に記したものはない。しかし、平安末には「野草衣」が納められており、これは梵字を書いたものである。これらのことからして、三途の川を渡る為に梵字等を書いたものではなからうか。

この時代になると死出の装いにあつては、古代からの纏束等も行われなくなり、河渡衣に象徴されるように、仏教的な色彩が濃厚になっていることがうかがえる。

(二) 平安時代前期の喪服

この時代になると、喪服の制度も整備されてくる。喪服には、死去してから近親者以下が一定期間着用する素服と、素服を脱いだ後、服忌期間中着用する服喪服とがある。素服は、死者が出ると日を選んで着服し、特定の期間が過ぎると脱ぎ、衾をして河等に流すものである。素服の中で、天皇が二親等以内の不幸の際に着る素服は、奈良時代を継承して錫紵と称された。

これらの錫紵や素服を着ける時及びその着用期間であるが、記録が明確な錫紵を中心に一覧表にしたものが表2-1である。これによると、死亡してから着服までの日数はまちまちであるが、それは卜日の関係によるものと思われる。しかし、天曆八年(九五四)の村上天皇の着服の時から、ほぼ着服日と葬送日が同じになっている。恐らく、この頃より着服の日は葬送の日とするという一定のルールが出来上がったかと思われる。

年	死亡者	服喪舎	死亡日	着服日	葬日	除服日	出典
八〇六(大同) 元	桓武天皇(父)	皇太子(平城天皇) 錫紵	三月十七日	三月十九日			日本後記
八四〇(承知) 七	淳和後太上天皇(伯父)	仁明天皇素服	五月八日	五月九日	五月十三日	五月二十三日	続日本後紀
八五〇(嘉祥) 三	仁明天皇(父)	皇太子(文德天皇)	三月二十一日	三月二十三日	三月二十五日	四月六日	文德実録
八五八(天安) 二	文德天皇(父)	皇太子(清和天皇) 素服	八月二十七日	九月四日	九月六日	九月十六日	三代実録
八七一(貞観十三)	太皇太后順子(祖母)	清和天皇錫紵	九月二十八日	十月五日		十月七日	北山抄
八八〇(元慶) 四	清和太上天皇(父)	陽成天皇錫紵	十二月四日	十二月七日	十二月七日	十二月十二日	三代実録
九〇〇(昌泰) 三	太后班子	醍醐天皇素服	四月一日		三日間着服		西宮記
九〇七(延喜) 七	中宮温子(継母)	醍醐天皇錫紵	六月八日		三日間着服		北山抄
九一〇(延喜十)	均子内親王(娘)	醍醐天皇		二月二十五日		二月二十七日	小右記
九三〇(延長) 一	醍醐太上天皇(父)	朱雀天皇錫紵	九月二十九日	十月一日	十月十日	十月十二日	吏部王記
九三一(承平) 元	宇多太上天皇(祖父)	朱雀天皇錫紵	七月十九日	七月二十五日	八月五日	七月二十八日	吏部王記
九三八(天慶) 元	勳子内親王(姉)	朱雀天皇錫紵	十一月五日	十一月九日		十一月十二日	小右記
九五四(天曆) 一	太后(祖母)	村上天皇素服	一月四日	一月十日	一月十日	一月二十二日	西宮記
	重明親王(兄)	村上天皇錫紵		九月二十日		九月二十三日	小右記
	雅子内親王	村上天皇錫紵	九月四日	九月四日		九月七日	西宮記
九六〇(天徳) 四	理子内親王(娘)	村上天皇錫紵	四月		一日で除服		中右記
九六六(康保) 三	式明親王	村上天皇錫紵		十二月二十二日		十二月二十四日	小右記
一〇一一(寛弘) 一	一条太上天皇(従弟)	三条天皇素服	六月二十二日	七月八日	七月八日		権記
	冷泉太上天皇(父)	三条天皇錫紵	十月二十四日	十一月十六日	十一月十六日	十一月二十七日	日本紀略
一〇一八(寛仁) 三	藤原道長(外祖父)	後一条天皇錫紵	十二月四日	十二月七日	十二月七日	十二月十日	権記
一〇三六(長元) 九	後一条天皇(兄)	後一条天皇錫紵	四月十七日	五月十九日	五月十九日	五月二十一日	左経記
一〇八五(応徳) 二	寛仁親王(弟)	白河天皇錫紵	十一月八日	十一月二十八日		十一月二十九日	為房卿記
一〇九六(永長) 元	白河(中宮)(妹)	堀河天皇錫紵	八月六日	八月二十日	八月二十日	八月二十二日	中右記
一一〇七(嘉承) 二	堀河天皇(父)	鳥羽天皇錫紵	七月十九日	七月二十四日	七月二十四日	八月五日	中右記
一一二九(大治) 四	白河太上天皇(祖父)	鳥羽院錫紵	七月七日	七月十五日	七月十五日	七月二十七日	中右記
一一九一(建久) 三	後白河法皇(祖父)	後鳥羽天皇錫紵	三月十三日	三月十九日	三月十五日	四月二日	玉葉

表 2-1 平安時代の着服・除服一覧 (筆者作成)

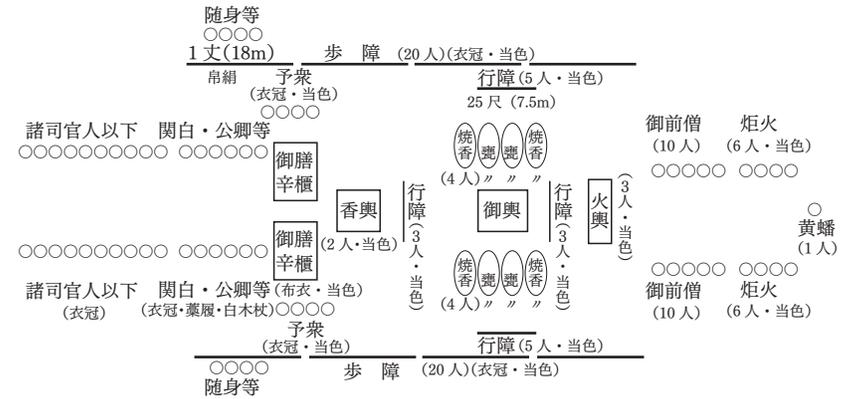


図 2-2 後一条天皇の葬送行列模式図 (筆者作成)

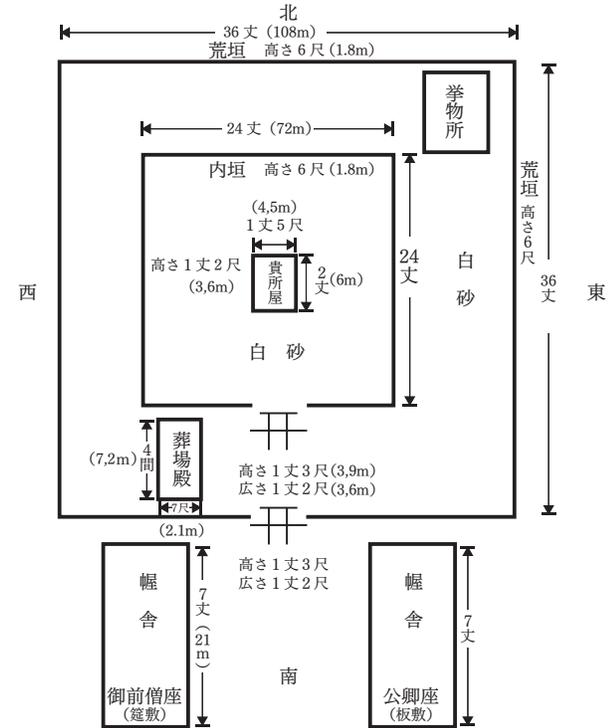


図 2-3 後一条天皇の山作所模式図 (筆者作成)

後に聞く。二人の持つ所の前火を取り合わせて一つ火として付け奉るなり。(七月二十四日条)と記している。今日まで地方に伝わっている「一つ火(枕火を茶毘の火とする)」の風習は既にこの頃にみられたものであることがうかがえる。

葬列は夜間に出発し、遺体を載せた御輿等は尋常の門からは出さず、塀を壊してそこから出している。一条天皇の場合も同様であった(『権記』嘉祥二年条)。嘉承二年(一一〇七)の堀河天皇の葬送の時も北築垣を破っており(『中右記』嘉承二年条)、これは平安時代を通じて行われていたものである。この風習は中国では古く殷代からみられたものであるが、タイ国等では今日でも行われている風習である。タイではその理由として、死者が帰来すると困るので、その道をわからなくするためとしているが、平安時代の我が国の風習もこのような意図からのものであったのであろうか。

葬列は、黄幡を先頭に、輿以下歩障・行障で覆われて火葬場まで運ばれたが、一条天皇の時も後一条天皇の時と同様に、黄幡、行障十六基、歩障八条が用いられている。幡や行障等は、既に六世紀半ば頃には用いられていた可能性が大きいものである。天皇の行障・歩障はいずれも帛絹を五幅縫い合わせて作る。行障一基の長さは約一・五mであるから、後一条天皇の場合は左右の行障の全長は約七・五m、前後の行障の全長は約四・五mとなり、これらで、御輿の四方を蔽った。そして、歩障一条の長さは約十八mであるから、全長は七十二mとなる。これを小舎人や蔵人が左右二十人ずつに分かれて持ち、御輿・香輿・御膳・唐櫃や閔白・公卿等を蔽って進んだのである(図2-2参照)。

葬列が山作所に到着すると、葬場殿に一時安置し、最期の供養が行われ、貴所(茶毘場)に移されて茶毘に付された。嘉承二年に崩御した堀河天皇の葬儀も、『中右記』によればほぼこれに準じており、平安時代

おわりに

まだ小学校に上がる前のことだったかと思う。岡山の片田舎に住んでいた私は、ある日突然、綺麗な青い着物を二枚重ねで着せられた。太平洋戦争が終わってまだ数年しか経っておらず、食べる物も乏しかった頃のことである。思いもかけず綺麗な着物を着せられたことが嬉しく、弾む思いで行った先は、祖父の葬式の間であった。

切った爪を白い紙に包み、お棺に入れるように促された。こわごわお棺を覗いてみると、そこには土色をした祖父の顔があり、額には白い三角巾がみえた。あの白い三角巾は何なのだろう。この時いだいた疑問を頭の底に残したまま日々は過ぎていったが、数年後に死去した母方の祖父の額にも、やはり白三角巾があった。子ども心に、白三角巾の意味を聞くことはなぜか憚られるような気がして、死んだ人は皆額に白三角巾をつけるのだと勝手に納得させて、この疑問はそのまましまい込んでしまった。

日本人の衣文化の歴史を研究するようになり、日本の喪服の色が「白↓黒↓白↓黒」と変化していることを知った。日本文化に大きな影響を与えた中国や朝鮮半島では、古代から今日まで一貫して喪服の色は白系統であり続けていたにもかかわらず、なぜ日本だけがこのように白・黒の変化をしたのか。

こうして、子供の頃から抱き続けてきた疑問である死者の額の白三角巾の意味と喪服の色の変化の歴史を追うことが、私の生涯の研究テーマとなったのである。

四十年弱勤務した学習院女子大学を去るに当たっての最終講義のテーマは「幽霊はなぜ額に三角をつける

のか」とした。小学校入学以来六十四年間もの長期に亘って関わり続けて来た学校生活との別れの時に当たって、入学前に持った疑問への答えを出すのが最も相応しいと考えたからである。この最終講義には多くの方々が聴講に来てくださり、興味を持った人たちから、三角額当てや現代の白喪服の事例の情報をお寄せ頂いた。大学での「日本生活文化史」では、葬送儀礼と喪服の歴史を主テーマとし、十数年間、史料と格闘しながらノートを作り、講義を進めてきた。珍しいテーマでもあり、また誰もが迎える人生最後の儀礼の歴史ということに興味を持ってくれたのか、大学では学生たちから「お葬式の先生」と呼ばれるようになっていた。この講義ノートをベースに、皆さんから寄せて頂いた情報等を精査し、加筆修正して完成したのが本書である。

昨年喜寿を迎えた。この「賀の祝」の記念に、幼児の頃から抱き続けてきた葬送儀礼に関わる装いの疑問に答えを出し、一冊の本に纏めることが出来たことは喜びに堪えない。

浅学ゆえに史料の読み方等に誤謬がある可能性もあるし、角度を変えてみると筆者とは異なった見方もできるかもしれない。読者の方々のご教示ご批判を頂けると幸いです。

本研究を完成させるに当たっては、多くの方々から資料提供等のご支援を頂きました。心より感謝申し上げます。本来であれば、一人一人の氏名を記して謝意を表すべきかと存じますが、膨大な人数になりますので、ここに纏めてお礼を申し上げることでお許しいただきたいと思います。ただ、本研究において必読の史料であった『装束雑事抄』の閲覧を有職文化研究所にお願いました所、わざわざコピーをしてお届けくださった研究所代表仙石久氏のお名前だけは特別に記して御礼を申し上げます。本当にありがとうございます。

ございました。

最後に、本書の刊行に当たって出版の労をとり、ご丁寧な校正をしてくださった株式会社東京堂出版の名和成人氏、及び編集部スタッフの皆様にご心よりお礼を申し上げます。

二〇二二年九月一日

【初出論文一覧】

- 「椽に関する一考察」『風俗』二九卷二号、一九九〇年
- 「日本古代における喪服の研究―白系統から黒系統への変化を中心に―」『服飾美学』二二号、一九九二年
- 「中世の葬儀と喪服―黒から白への回帰―」『学習院女子短期大学紀要』三〇号、一九九二年
- 「人物埴輪の意味するもの」『学習院女子短期大学紀要』三四号、一九九六年
- 「平安時代の葬送装束―素服を中心に―」『日本家政学会誌』Vol.51 No.4、二〇〇〇年
- 「平安時代の喪服―諒闇装束を中心に―」『日本家政学会誌』Vol.52 No.10、二〇〇一年
- 「葬送儀礼における被り物の意味―白三角額当てを中心に―」『国際服飾学会誌』No.51、二〇一七年

【著者の葬送関連の既刊行図書】

- 『日本喪服史 古代編―葬送儀礼と装い―』源流社、二〇〇二年
- 「第一章 東アジアの葬送儀礼と装い」『第三章 葬送儀礼とその装いから見た文化比較』（増田美子編著『葬送儀礼と装いの比較文化史 装いの白と黒をめぐる』東京堂出版）、二〇一五年